

働き方改革とダイバーシティを考える 最近のテレビドラマを手がかりに

大橋 稔

はじめに

2020年1月15日、小泉進次郎環境大臣は2週間の育児休暇を取得することを発表した。その内容は各種メディアで紹介され、さまざまな立場からの論評が寄せられた。インターネット上には、さまざまな市民の意見が紹介や投稿されている。市民からの意見としては、概ね好意的に受け取られているようで、男性の育児休業取得の促進につながるのではなどの期待が寄せられていた¹。男性の育児休暇取得率が極めて低い日本では珍しい出来事として海外のメディアにも取り上げられた。

しかし永田町や専門家の反応はやや異なっていたようである。彼らの評価の主眼は、環境大臣としての職務に影響があるのか否かにおかれていた。また多くは小泉大臣の育児休暇取得に肯定的な態度を取りながらも、同時に休暇取得にあたってはしっかりと関係各所と調整をして欲しいとの意見が付されてもいた。しかしここで一つの疑問に突き当たる。男性が育児休暇を取得するために、離職中の職務の穴埋めの調整を本人が行わなければならないのだろうか。

男性の育児休業取得率が日本で低いことの理由の一つに、職場での理解が得難いことがあげられている。このような状況を変えようとするなら永田町や霞が関が関がすべきだったのは、大臣としての職務遂行が可能かどうかを心配する声を発するよりも、彼が休暇を取れるよう関係各所が支援体制を整えるように求めることだったのではないだろうか。またそのような姿勢を示すことによって、男性の育児休業取得の雰囲気醸成することが必要だったのではないか。

またこのような声が上がらなかったことに、日本における働き方改革の問題点が垣間見られるのではないだろうか。これまで女性の就労機会の拡大を含め、働き方改革をさまざまに行ってきた。その結果、時短労働や柔軟な勤務体制など、働くための器の改革がなされた。またそれと並行して、働き方のモデルを示すためのロールモデル育成にも取り組んできた。しかしそれでもその影響は限定的であり、すべての人のための改革にはなり得てはいなかったのではないだろうか。その問題点や不備が、小泉大臣の育児休暇取得宣言に対する反応によって露になったように思われる。

本稿では、改めて働き方改革には何が必要なのかを考察する。その際、参考にするのはテレビドラマである。当然それらはフィクションであり、現実の反映ではあり得ない。しかしだからこそ、そこには多様な理想が書きこまれているのであり、その一つとして理想の働き方が描かれているのではないかと考える。その理想を読み解くことで、働き方改革に必要とされる課題をあぶり出すことが、本稿の課題である。

また本稿では二つのテレビドラマを取り上げるが、そのいずれも働き方をテーマとした作品ではない。しかしどちらの作品にも、働く人々の変化が副次的に描かれている。そのような副次的な扱いとして描かれているからこそ、作為的ではない無意識の理想が反映されているのではないかと考え分析対象とした。本稿ではそれぞれの作品の概要と、それぞれで描かれた変化の分析をまず行う。次いでそれらの共通点を明らかにする。そこから働き方改革に必要な視点は何かを明らかにしたい。

I. 『僕らは奇跡でできている』の場合

1) 物語の概要

『僕らは奇跡でできている』は、関西テレビが制作し、フジテレビ系列で放送された全10話のテレビドラマである。完全オリジナルストーリーで、脚本は橋部敦子が手掛けた。放送期間は2018年10月9日から12月11日で、2018年11月には、木俣冬によるノベライズ版が全2巻で、扶桑社より発売されている²。

さてこの物語は、都市文化大学で動物行動学を教える相河一輝を中心に展開する。ノベライズ版の帯に「あなたの“フツウ”をざわつかせる」「高橋一生がちょっぴりユニークな生き物大好き大学講師!？」と記されている通り³、主人公である相河は常識や固定観念に囚われることのない人物である。そんな彼の行動は周囲の人々を困惑させるが、その困惑を経ることで周囲の人々もまた自身の固定観念を打ち破り、問題を乗り越えて成長するというのが、基本的な物語の展開になっている。

ある時相河は、コンニャクに関心を持つ。時間と手間をかけなければ育てることができず、またそのままの芋としては食べることのできないコンニャクが、1000年以上ものあいだ絶滅することなく製造され続けてきたことが偉大だと考えたのである。この考えは、教え子である新庄龍太郎に変化をもたらす。新庄の実家はコンニャクの製造業を営んでいたが、彼は家業に積極的な意味を見いだせず、継がなければならないことに不満を感じていた。しかし相河のコンニャクを絶賛する言葉に、気持ちが動かされるのである。しかし、話は一筋縄では進まない。

「新庄さんもコンニャクを作るんですか?」「……作るわけないし」「そうですか」とだけ言うと、一輝は「じゃあ」と歩き出す。

「……あの——」と龍太郎が一輝を呼び止め、もじもじしながら「……作ったほうがいいのか」と聞いた。「どうしてそう思うんですか?」「……だって、先生がコンニャクすごいで言うし……親だって……俺がコンニャク屋やるって言ったら……嬉しいと思うし」

ところが一輝は龍太郎の予想の斜め上をいく返事をした。「僕が新庄さんなら、作りません」「……はあ?」「作りません」一輝はもう一度きっぱりと言った。龍太郎は落胆する。「……わかりました。聞いて損した」背中を押してもらえと思ったのに、なんだかがっかりだ。(上巻199-200頁)

コンニャク屋を継ごうとする気持ちに、相河なら積極的な意味を持たせ、肯定してくれると期待していた新庄は落胆するのであった。しかしここには相河なりの、「普通」に囚われない価値観があった。

「主語が新庄さんではありませんでした」「主語?」「コンニャク屋を継ぐ理由の主語です。先生がコンニャクをすごいで言ったから、親が喜ぶと思うからって言ってました」(上巻245頁)

行動するか否かの判断基準が自分が興味を持っているか否かである相河は、新庄の家業を継ぐという気持ちが彼の興味関心によるものではなく、周囲の判断に影響されたことだと見抜いていたのである。そのため彼は「僕なら」と答えるのではなく、「僕が新庄さんなら」として答えていたのである。その後新庄は、興味を持って取り組むことができることに会い、有意義な学生生活を送ることになる。

このように相河の「常識にとらわれない発想」が周囲に影響を与え、それぞれに成長をもたらすのが『僕らは奇跡でできている』の基本的な物語である。

2) 水本育実の働き方

この物語のヒロインは水本育実であり、彼女もまた相河との交流を経て成長を遂げることになる。彼女の人物像について、次のように説明されている。

一輝を担当する歯科医師。容姿端麗で若くして院長を務めるエリートだが、真面目で頑張りすぎるゆえに、仕事もプライベートもうまくいかない“こじらせ気味”な一面も。(上巻4頁, 下巻4頁)

この紹介文にある通り、水本は父から歯科医院を引き継ぎ、その経営のために努力していた。彼女の父は、地域に根ざした歯科医院として医院を運営してきたのだが、

彼女もまたその方針を受け継ぐことに必死だった。ある時彼女は、地域の子どもを対象にした歯磨きイベントを計画した。しかし申し込み状況は芳しくなく、参加者を集めるための方法を考えていた。そんな彼女の様子を見て、歯科衛生士の丹沢あかりは「そのイベント、やらなきゃいけないんですか？」と質問する。この質問に水本は次のように答えている。

「このクリニックは三十五年間、地域の人々に貢献してきました。父が積み上げてきたものを私が壊すわけにはいかないから、私にできることは小さなことでもやりたいんです」(上巻228頁)

この答えから明らかになるのは、水本の仕事に対する姿勢である。彼女は、歯科医師水本育実として地域に根ざし、貢献することに一生懸命だったわけではない。彼女が必死になっていたのは、父が残した地域からの信頼を守ることだったのである。それゆえに彼女は、「この地域には必要ないから」と自分を言い聞かせるようにしながら、自分がやりたいことを見ないようにしてきたのである。

さて水本のプライベートに目を向けるなら、料理教室に申し込んでおきながら、まったく通うことができていなかった。相河のような予約時間に遅れてくる患者の診療をしなければならないため、彼女はプライベートを犠牲にしなければならなかったのである。彼女はそのようなとき「患者さん優先だから」と言っており、プライベートよりも仕事を優先させていたことがわかる。

水本歯科医院の診療日は、月曜、火曜、木曜、金曜であった。そして水本は水曜と土曜は、銀座のクリニックに勤務していた。そこで彼女は、水本歯科医院では行っていない、審美や矯正を行っているのだと言う。ある時、彼女は雑誌のインタビューで次のように話している。このインタビューは、「メジャーな女性誌」の輝く女性特集のためのものだった。

「審美歯科の技術を習得するために、国内のクリニックだけではなく、ニューヨーク大学に留学していろいろな場で技術を学びました。また、父から引き継いだクリニックのために、経営学も学びました」

「歯は全身の健康に関わるもので、とても大切です。患者さんが健康になったら、審美の技術で綺麗になって喜んでくださることが、私の一番の喜びです」(上巻47頁)

水本は歯科医師として、歯の健康が全身の健康に関わることをよく理解していた。また父から医院を継ぎ、地域貢献をしなければならないという役割も十分に認識して

いた。それゆえに彼女は、歯科医師としての技術だけではなく、経営も学び、医院の経営に努力してきたのだ。その一方で彼女は、歯が美と関わっていることも理解し、それが心の健康や自信と関わることも理解していた。またこのインタビューから、彼女がやりたい診療とは、むしろ歯の美に関わることであることが読み取れる。だから彼女は、銀座のクリニックでの非常勤の仕事に遣り甲斐を感じているのである。そして彼女は、その治療が保険適応外の高額な自費診療であるため水本医院には必要がないと諦めていたのである。

つまり水本は、彼女自身が本当にやりたいことから目を背けつつ、父から引き継いだ水本歯科医院の院長としての役割を演じることに必死になっている女性だったのである。役割を演じることに一生懸命だった彼女は、丹沢あかりやパートナーの鳥飼雅也から「上から目線」「見下している」などと言われることもあった。それでも彼女は、「どうせあなたみたいな人には分からない」と言いながら、頑なに役割を演じ、周囲に期待をせず一人で責任を果たそうとする女性だったのである。そしてそのような働き方をする彼女が、「輝く女性」として雑誌に紹介されたのだ。

3) 水本育実の変化

このような水本であったが、彼女もまた相河の「普通」に囚われない行動に困惑しながら、彼との交流を通じて変化を遂げることになる。その兆しとなるのは、先に紹介した新庄をめぐる場面だろう。「主語が新庄さんではありませんでした」の箇所なのだが、この場面は相河が新庄に語っているわけではなかった。新庄ががっかりしていることを知った水本が、相河の真意を確かめている場面だったのである。ここで相河は、新庄の考えが彼自身の主体的な考えから導かれたものではなく、周囲からの視線によって形成されたものだったことを指摘している。新庄について言及しているわけだが、この指摘はそのまま水本にも当てはまっていたと言えるだろう。

水本は相河から、「僕は水本先生のことが、面白いです。」「僕は、面白いって思っています」(下巻193頁)と言われる。診療の予約を忘れたことを怒り、ある時は突然涙を見せ、餃子の形を整えることにこだわり、ヤモリを家から外に出そうとする水本は、「常識にとらわれない」相河にとって不思議な存在であった。そのさまざまな感情を与えてくれる水本を相河は「面白い」と表現したのである。しかし彼女にとって、それは意外な評価だった。「真面目なだけの融通の利かない自分」(下巻, 194頁)と自己分析する彼女にとって、そこのどこに面白みがあるのか理解できなかったのだ。そこで彼女は、「あの、私って面白いですか?」(下巻, 194頁)と歯科衛生士である丹沢や坂下祥子に訪ねてみることにした。

院長として責任を果たすことに必死で、仕事を一人で抱え込み、そして時には歯科衛生士を見下すような態度をとってきた水本からの突飛な質問に、二人は呆氣にとら

れ言葉を一瞬失う。そして丹沢は、「自分が面白いかどうかを聞く院長は、ちょっと面白いです」(下巻194頁)と答え、坂下もそれに同意する。やはりここでも「面白い」という評価を得た水本は、腑に落ちない感じがした。しかし「あかりと祥子の表情からは好意的なニュアンスが感じられ、なんだか悪くない気がしてきた」(下巻194頁)のであった。この場面は、父が築いた医院の信頼を守らなければならないという責任感のために身に纏っていた鎧を彼女が脱いだ瞬間だと言える。

さて院長が不要な鎧を脱いだ水本歯科医院は新たな一步を踏み出すことになる。

ふたりが心配そうに見つめていることに気づき、慌てて「……お疲れさまでした」と返した。

「……どうかしましたか？」

あかりが育実の顔を覗きこむと、育実は「……本当に、これ以上のことができないのかな」とため息をついた。

あかりと祥子は育実の真意をつかめず、顔を見合わせた。

「今までインプラントはこの地域じゃ需要がないとか、ただでさえ苦手なお金の計算の負担が増えるとか、やらない理由ばかりを見つけていました。そうじゃなくて、やるとしたらって、考えてみようかなって」

するとあかりが、なんでもないことのように言った。

「まず、苦手なことは、人に任せちゃえばいいんじゃないですか。そうすれば、院長、治療に専念できますよ」

「……考えたこともなかった。全部自分でやらなきゃって思ってたから」

「ちなみに、私、得意ですよ」とあかりが言った。

「何が？」と祥子が聞くと、あかりは「経理」とさりりとってのける。(下巻230頁)

父の後を継ぐという責任を果たすことにこだわり、自分が本当にやりたいことから目を背け、そのような自身を納得させるためにやりたいことをやれない理由ばかりを水本は見つけようとしてきたことが、この場面から明らかになる。彼女にとって医院を経営することとは、すべての責任を彼女自身が背負うことだった。もちろんこれは、経営者として当然のことではあり、今後も変わることはない現実であろう。しかしこの場面で彼女は、自分がやりたいこともやりながら責任を果たす方法がないかと考えるようになったのだ。

その思いを声にしたことで水本は、彼女が苦手と感じていた経理を引き受ける丹沢の存在に気付くことになる。しかし丹下に経理を任せることは、丹下が歯科衛生士としての役割を果たせなくなることを意味する。ここで予想外の新たな問題が生じたの

だが、この問題を解決したのが、坂下から別の提案だった。フルタイムでは難しいが職場復帰を望む子育て中の歯科衛生士の友人が何人かいるというのだ。これで予想される困難を乗り越える目途が付き、「なんか、できるような気がしてきました」(下巻231頁)と水本は笑顔を見せるのだった。

この場面で水本は、相河の表現を借りるなら、主語を私に置き換えて考えるように変化したと言える。それにより彼女は、自分がやりたいと思うことに挑戦できる環境を整えることができるようになったのである。

Ⅱ. 『ラジエーションハウス』の場合

1) 物語の概要

『ラジエーションハウス：放射線科の診断レポート』は、フジテレビが制作し、フジテレビ系列で放送された全11話と、最終話の翌週に放送された特別編からなるテレビドラマである。原作は漫画『ラジエーションハウス』であり⁴、テレビドラマ用の脚本は大北はるかなど4名が手掛けた。放送期間は2019年4月8日から6月17日で、6月24日に特別編が放送された⁵。

物語の主人公は、天才的な撮影技術と読影技術を有する診療放射線技師の五十嵐唯織である⁶。技師としての技術と実力は高いのだが、コミュニケーション力にはいささか問題がある。また病を見つけ出すために猪突猛進する彼は、周囲の理解を得られず病院を転々とすることになる。そしてたどり着いたのが物語の舞台である甘春総合病院であった。彼が放射線技師になったのは、幼い頃に初恋の相手とした約束を果たすためだったのだが、その相手が甘春総合病院の放射線科医である甘春杏だった。五十嵐の型破りな行動は周囲を翻弄させるのだが、その彼との交流を通じて甘春総合病院のラジエーションハウスとそこに関係する人々がそれぞれに成長を遂げていく。それがこの物語の基本的な展開になる。

診療放射線技師について「診療放射線技師法」(1951年制定)には以下の通りの定義が示されている。

第二条 2 この法律で「診療放射線技師」とは、厚生労働大臣の免許を受けて、医師又は歯科医師の指示の下に、放射線を人体に対して照射（撮影を含み、照射機器又は放射性同位元素（その化合物及び放射性同位元素又はその化合物の含有物を含む。）を人体内にそう入して行なうものを除く。以下同じ。）することを業とする者をいう。

ここで重要なことは、技師は医師や歯科医師の指示の下で業務を行うことが明確に

定められていることだ。法律の定めがある以上、物語の世界であったとしても、この規定を大幅に無視することはできない。そのため物語には、技師たちの経験に基づいて更なる検査（撮影）が必要だと感じて、医師の指示や許可がないために撮影ができない場面が描かれている。そしてそのような状況に馴れてしまった技師たちは、「お医者様の言うとおりに撮影すれば良いのだ」と、自身に言い聞かせるようにしながら、機械的な作業として業務を続けているのであった。『デイリー新潮』のサイトには、次のような現役放射線技師の声が紹介されている。これは、五十嵐が猪突猛進し医師を説得し、検査を追加し続けていることに対して寄せられた声である。

「何があるかわからない段階でMRI検査までやるということは、まずありえません。MRI検査は、腫瘍やがんがあるとほぼ確定した状況で、それがどこまで広がっているかを詳細に確かめるための検査なので、ドラマのように簡単にできるわけがありません。実際は、すべての医療行為を行える医師と違って、技師は検査や治療のGOサインを出す権限は持っていないため、もどかしさを感じる人が多いです」

さらにこの記事には、形式的には昼休みがあるものの、まったく休みなど取れない状況や、診療時間終了後も続く仕事のこと、同期の技師たちはみな離職し残っているのは自分一人であることなど、現役の技師に過酷な状況が紹介されている。このような状況を型破りな行動で打破して行くのが五十嵐であった。

2) 甘春杏の働き方

甘春杏は、この物語のヒロインであり、甘春総合病院のラジエーションハウスで働く放射線科医である。彼女は、型破りな五十嵐に反感を持ちつつも、交流を経ることによって変化を遂げていくことになる。彼女の人物像について、番組ホームページでは次のように紹介されている。

甘春総合病院の前院長の娘で放射線科医。患者を常に助けたいと思っているが、病院側の人間として、患者よりも病院のルールや効率を優先してしまうことも。また医師免許を持たない（放射線）技師を下に見ている。真面目でプライドも人一倍高い性格だが、実のところ自分にまったく自信がない。

甘春は父である元院長の、放射線技師が良い「写真」を撮り、放射線科医が的確な診断を行い、そして臨床医が適切な治療を行う、という理想を実現すべく医者になることを目指し、そして放射線科医になった。彼女には兄がいて、彼が病院を継ぐもの

だと考えられていた。しかしその兄が事故死してしまったことにより、その役割を彼女が果たさなければならなくなる⁷。実際には父が病に倒れた後、大森渚が院長に就任するのだが、ゆくゆくは甘春が院長に就任するものと周囲からは考えられており、また彼女もその責任を果たすべく努力を重ねている。

また兄の事故死の責任が自分にあると考えていた甘春は、父に加えて兄の存在も背負い、院長になるにふさわしい存在に成長しなければならないという重圧を感じていた。それ故に彼女は、父の理想を共有し、それを実現するために医師になったにも関わらず、病院のルールや効率を優先する選択をしなければならないことも多々あったのだ。そのような環境に身を置き続けることによって、医師を上、技師を下に見る態度、つまり病院社会に構築された権力構造に基づく役割を無意識のうちに獲得し、演じるようになってしまっていたのだ。

五十嵐：あ、あの。菊島さんの検査を、もう一度、僕にやらせていただけないでしょうか。

甘 春：ああ、その件なら、軒下さんにお任せしたはずです。技師の方は医者への指示に従って、マニュアル通り検査だけを行っててください。

五十嵐：や、あのっ……

小野寺：やめとけっ。何言っても無駄だ。

黒 羽：技師の言うことなんて、うちの医者は聞く耳持たない。

五十嵐：待ってください。

甘 春：何ですか。

五十嵐：必ず、何か見える方法があるはずなんです。やらせていただけないでしょうか。

甘 春：じゃあ、何か具体的な方法でも見つかったんですか。

五十嵐：いや、まだですけど、でも、

甘 春：やみくもな検査は、かえって患者の負担になるだけなんです。失礼します。(第1話より)

人物紹介にある通り甘春は、医師として自分に自信が持てずにいた。また他人の生命を扱う職業において、背負わなければならない責任は重大である。その自信のなさや重圧を回避する方法は、リスクを冒さないことである。しかしそれは時に、責任転嫁の態度にも通じる。実際彼女がリスクを覚悟して検査を行おうとしたとき、彼女の上司である鍋木は、「それが甘春先生の診断なら」と言って、リスクを冒す責任を彼女だけに押し付けるような態度を取っている。そのような状況の中で彼女は、既に構築されている権力構造によって与えられている権威にしがみつかなければならなかつ

たのだらう。医師という権威によって自信のなさを隠し、「責任は自分がとる」という名目で技師の意見には耳をかさないことによって医師としての権威を守っていたのだ。

しかしそれは甘春が父と共有した理想の病院のあり方からはかけ離れていく行為でもあった。彼女が現実の中で責任を果たそうともがけばもがくほど、彼女の理想からは遠のいていくという負の螺旋に陥っていたのだと言える。その背景には、突如として降ってわいたかのような兄の代役という役割、つまりジェンダーを越境した責任を背負わなければならなかったことも影響を与えていたのだ。女性である彼女が、男性である兄の役割を背負うためには、医師の権威という鎧を纏い、男性役割を演じなければならなかったのだ。

3) 甘春杏の変化

このような甘春であったが、五十嵐や彼に触発されて変化を遂げる技師たちとの交流を経て、徐々に変化していく。番組ホームページで五十嵐の人物像は、「写真には必ず“真実”が写ると信じている放射線技師」と紹介されている。この言葉通り彼は、病を正確に映し出す「写真」を撮り、甘春をはじめとする医師たちや多くの患者たちを繰り返し支えていくのだ。先に引用した場面のあとでも、五十嵐は最終的に撮影方法を見つけ出し、造影剤アレルギーのある菊島に造影剤を用いた検査を強行しようとする甘春を救うことになる。

それでも一度身につけた権威を手放すことは簡単なことではなかった。五十嵐らの能力の高さを感じつつも、技師の仕事は医師の指示に従い、マニュアル通りに最高の仕事をすれば良いのだという態度を改めることがすぐにはできなかったのだ。そのため甘春は、技師長である小野寺には「ありがとうございます」などの感謝を述べるようになりながらも、他の技師に対しては「上から目線」の態度を続け、五十嵐には「あなたには負けませんから」と応え、上下関係を固定化しようともするのである。

その後も甘春は、医師らが見落としていた病変や、診断のつかない患者の治療方針を、五十嵐ら技師たちが再検査で撮った正確な「写真」によって見つけ出す経験を繰り返す。これにより彼女は徐々に技師に対する態度を変化させていく。彼女は、技師たちは医師の指示に従いマニュアル通りに撮影さえすれば良いのだという考えを改めていくのだ。それは彼女が、指示する医師と指示される技師という病院社会における権力機構に基づく考え方から脱却することを意味していた。

大森：随分、見やすい画像ね

甘春：院長

大森：「ここに病変があります」「気付いてください」って言われてるみたいね

甘春：すっかり忘れてました。この病院で、放射線科医の存在を認めさせることばかりに頭がいて、技師の大切さは、父から聞いていたはずなのに……

大森：それに気づけただけ、大きな前進じゃない？（第2話より）

甘春の変化は、病院内における放射線技師、放射線科医、臨床医という関係に変化をもたらすことになる。彼女は、最終的な診断を下し責任を取る立場にあるのが医師だと考えていた。そのような関係性のあり方は、責任を問われない者は責任を持つ者の指示に従うべきだとの考えにつながる。このような考え方は、相手を信頼しないことを基盤にした考え方であったとも言える。なぜなら、相手を指示に従わせようとするのは、その能力を認めないことであり、自由な行動はミスの原因になるとの考えにほかならないからだ。甘春は「技師の大切さ」を思い出すことによって、上下の不信頼に基づく行動から、信頼に基づく行動へと変えていったのである。

甘春の父が言う「技師の大切さ」とは、放射線技師が撮影する「写真」なしに放射線科医の診断ができないという事実を述べているだけではない。放射線科医の診断は技師の撮影への信頼なしには成立せず、臨床医の治療もまた放射線科医の診断への信頼なしには成立しないことを示している。さらには、「写真」が適切な診断に用いられるという技師の放射線科医への信頼や、診断が治療に活かされるという臨床医への信頼でもある。「技師の大切さ」とは、病院の各組織を信頼によってつなげることだったのである。それは病院を指示系統による権力関係と見做すのではなく、互いがそれぞれの責任を果たす仲間によって成立する関係へと変化させるのである。

元院長：本当は、君にお礼をしなくちゃいけないのかな？

五十嵐：あっ、いえいえ、僕は全然何もしていません

元院長：ありがとう、杏を助けてくれて。しばらく見ない間に、杏はね、君のおかげで、医者として大切なものを思い出してくれた。自分の弱さを認める勇気をね。ずっとそばにいて見守ってやることだけが、あの子のためだ。そう思ってたんだけどね、そうじゃなかったみたいだ。（第11話より）

甘春の変化は、病院という社会に形成されていた権力構造に基づく行動様式から脱却することによって達成された。放射線技師と放射線科医、そして臨床医が果たすべき役割を上下関係として認識するのではなく、相互に補い合う対等な役割として認識するようになったのである。その結果彼女は、自らに足りない部分があることを認めることができるようになり、助けを求めることができるようになった。それは彼女が技師を信頼することを意味しただけではなく、互いを信頼し合う関係性を作ることに

つながった。それはまた組織を強めることにもなる。なぜなら互いの対等な役割をそれぞれが認識することは、自らの果たすべき役割を理解することでもあり、その責任を全うしようとする意識を持つことにもなるからだ。この変化は、彼女が権威という鎧を脱ぎ捨てることによって達成されたものであったが、一方で父と共有していた理想を取り戻すことであったとも考えられるだろう。

Ⅲ. 二つの物語が示した働き方改革

1) 翻弄される「普通」

『僕らは奇跡でできている』は、主人公を取り巻く人々がそれぞれに変化することが描かれた物語だった。そしてその中には、彼が勤務する研究室の人びとの変化も含まれている。一方『ラジエーションハウス』もまた、主人公が働く職場に変化がもたらされる様子を描き出した物語であった。これら二つの物語は、職場の変化を描いていたという点において共通している。そしてその変化をもたらしたものは、「風変わりな」主人公だったことも共通している。

相河一輝は、「生き物の不思議や謎を見つけると、ほかには目もくれず没頭してしまう。そのため、職場のルールを守れず、周囲をざわつかせることも多い」(上巻4頁, 下巻4頁) 人物だと紹介されている。そんな彼は、他の人とは異なる視点を持つ人物でもある。その一例として、「ウサギとカメ」の物語の解釈が紹介されている。一般的にカメがウサギに勝つことができたのは、「器用じゃないけどコツコツ頑張るタイプ」(上巻60頁) だと考えられている。しかし相河は、「カメは、全然頑張っていない。競争にも勝ち負けにも興味がないんです。カメは道を前に進むこと自体が楽しいんです」(上巻60頁) と解釈する。飛べない鳥とは、鳥が飛ぶことだという決めつけからの表現である。しかし常識に縛られない相河は、「飛びたくない鳥」という解釈の可能性を提示する。そんな彼の視点や生き方が周囲に影響を与えたのである。

一方の五十嵐唯織は、診療放射線技師として働いているが、実際には医師免許も有している。彼はそのことを隠しながら働き続けていたのだが、それは一般的には全く信じ難い常識外れの行為だった。医師免許の保持者であることがバレたとき、医師だけではなく、同僚の技師たちからもまったく理解されなかった。病院社会における上下関係を自明のものとして(不本意かもしれないが)受け入れ、それに従うしかないと思いついて人々にとって、上位に入ることができる者が好んで下位に属することが理解できなかったのである。物語には、医師が技師を見下すかのような場面や、技師が医師に諂うような場面が幾度となく描かれている。しかしそのような価値観は五十嵐には全く無用なものだった。なぜなら彼が医師免許を取得したのは、世界一の放射線技師になるためには病気のことを知っているべきだとの考えからであり、放射

線技師であること以外にまったく興味がなかったからである。そして彼は、患者の病気を見つけるために「型破り」な行動を繰り返し、彼の病を写そうとするひたむきさに触れた周囲の人々が変化を遂げていくのであった。

つまりこれら二つの物語で変化をもたらしたものは、「普通」の社会に突然投入された「異質」な主人公だったと言える。「普通」だと考えている社会に属し、それに慣れ親しんでいる者たちは、「異質」な存在を嫌い、「異質」な者たちに「普通」になることを強要する。しかしその一方で、「普通」であることが本当に「普通」なことなのかと感じる者たちもいる。彼らは「普通」であることに疑問を投げかけ、「普通」と「異質」との間で揺れ動きながら、変容を遂げていく。ここでは「異質」を「異質」として扱ったまま「異質」が存在することのみを認めようとしているのではなく、「異質」と「普通」が相互に影響を与えあうことでそれぞれが変化するのだ。『僕らは奇跡でできている』と『ラジエーションハウス』における変化は、「普通」であることにとらわれない主人公がもたらす、周囲の「普通」の人々との軋轢や摩擦によってもたらされたものだった。

2) 変化の連鎖

相川の影響で水本育実は、「やらない理由を探す思考方法」から「できる理由を探す思考方法」へと変化する。その結果、水本歯科医院はそれまでとは異なる職場へと変革される兆しをもたらされた。水本の変化を知った歯科衛生士の丹沢は、「苦手なことは人に任せる」という考え方を提案し、経理が苦手だとする水本に「私、得意ですよ」と伝える。それまですべてを一人で行わなければならないと考えていた水本にとって、それは全く想定外の働き方だった。しかしここでより重要なのは、水本の変化が、丹沢の変化を導いたことだ。それまでの丹沢は、ただ与えられた仕事をこなすだけの存在だった。しかし彼女は水本の変化を受け、自分に何ができるのかを含め積極的な提案をするように変化したのだ。そしてその変化は、同じく歯科衛生士の坂本にも波及する。

「それ（＝経理）を丹沢さんをお願いしたら、歯科衛生士さんを増やさないとはいけません。今は、どこも歯科衛生士さん不足ですから、なかなか難しいんじゃない」

「あ！ 子育て中でフルタイムで働けないけど、職場復帰したいと思ってる知り合いが何人かいます」と祥子が声をあげ、あかりが「それだ！」と即座に返す。

ようやく育実は「なんか、できるような気がしてきました」と顔をほころばせた。なかなか橋を渡ろうとしなかったリスが、屋根をつけたら渡るようになったのに似ている。育実の眼前には橋の向こうが見えてきた。（下巻231頁）

以前の坂本もまた、家庭を理由に与えられた仕事をするだけの存在だった。また職場での人間関係を第一に考えるため、余計な意見は言わない女性でもあった。しかし水本と丹沢の影響を受けて彼女もまた、積極的に意見を述べるようになったのである。そしてそれは三つ目の異なる視点を医院に提供し、可能性を広げたのであった。

院長である水本にとって、すべての責任を果たすため一人で何事も背負わなければならないというのが「普通」の考えだった。しかし「普通」の枠を取り払い、異なる視点を導入した時、まったく異なる水本歯科医院のあり方を考えることができるようになったのである。

一方『ラジエーションハウス』の甘春杏もまた五十嵐の影響を受け、一人で責任を背負わなければならないという考え方を払拭することになった。彼女は、「技師よりも医師、民間病院よりも大学病院。そんなのないんじゃないでしょうか。大事なのは立場とか場所とかじゃなく、何をやるかなんじゃないのかな」(第9話より)と考えるようになったのだ。その結果彼女の働き方は変わり、技師を信頼するようになった。さらに彼女の変化は、技師たちにもそれぞれが責任を持ってやるべきことを最大限のパフォーマンスで達成しようとする意識を持たせることになったのである。

第1話では就業前にオーダーが入ったことに対し、「過重労働」「お医者様の言う通りにすれば良いんだ」「技師は撮影したらそれで終わり、それ以降は医者の仕事」などの技師たちの発言が飛び交っていた。そこには仕事に対する情熱や、プライドを感じることができない場面であった。しかし最終話に間近の第10話では、次のように変化している。

五十嵐：どうして？

軒 下：お前の考えそうなことなんて、お見通しだ

広 瀬：どうせ、また、何か見えちゃったんですよね

悠 木：いつまでも、抜け駆けさせるわけにはいかないからな

威 能：こっちにも、技師としてのプライドがありますからね

小野寺：ほら、さっさと準備しろ

甘 春：みなさん、オーダーが出なかったら、どうするつもりだったんですか？

黒 羽：何が何でも出させるでしょ？ あんたたちなら

悠 木：さっ、残業頑張りましょう

黒 羽：OK

広 瀬：はい(第10話より)

この場面は、文字起こしだけでは伝わりにくいのだが、医師も技師もそれぞれに自

分の仕事にプライドと情熱を持って臨んでいることが伝わる場面である。そこには、互いへの信頼と、それに応えようとする意識に溢れていた。またここに続く場面では、「完璧になんてできなくて、いいんじゃないですかね？ いるもんですよ、ちょっと周りを見渡せば、自分に足りないものを補ってくれる誰か。私たちの仕事も、同じようなもんですよ」というセリフが出てくる。これは育児に悩む母親に対する技師の言葉であるが、ここからもチームとしての信頼感や、足りないことを自覚しながらその中で最高のパフォーマンスを行おうとする意識を読み取ることができる。

医師として責任ある立場の甘春の意識の変化は、「型破り」な五十嵐の行動によって揺さぶられ変化した。それにより彼女の下で働く技師たちの意識も変わり、以前とは全く異なる意識、雰囲気職場へと変わったのである。

院長と、将来の院長という二人のリーダーの意識の変化が、職場の雰囲気を変えたという点において二つの物語は共通している。しかもこの変化がもたらしたのは、働くための制度や条件の変革ではなかったという点でも共通している。新しい意識を持ったリーダーの下で働く者たちに、働くことに対する意識の変化がもたらされたことによってなされた変化だったのである。

まとめ

水本育実は院長であり、甘春杏は院長になることが期待された存在であった。それは二人がリーダーとしての素質を持っていることが期待された存在であることを示している。しかし二人は、自分に自信が持てない女性でもあった⁸。それを隠すために彼女たちは、男性的な鎧を纏い、役割を演じなければならなかった。そしてその仮面を脱いだ時、彼女たちは新しい可能性、彼女たちの新しい役割を切り開くことになる。彼女たちが開いた新しい道は、周囲の人々に向ける視線を変え、そして彼らにも新しい世界を提示するのである。

働く人たちに向けられる視線が変わることによって、働く環境が大きく変わることがテレビドラマ『僕らは奇跡でできている』と『ラジエーションハウス』の事例は示している。またその変化は、「普通」だと信じていることに疑問を持つことによってもたらされることが示された。しかし誰にとっても「普通」に疑いを持つことは難しいことである。だから多様な価値観が共存することが求められているのである。

しかし意識の変容は、価値観が多様に存在するだけでもたらされるわけではない。互いに関係しながら互いを理解しようとする意識が必要なのである。このことが『ラジエーションハウス』では象徴的に示されている。最後のエピソードは、必要に迫られて行った五十嵐の医療行為に関するものだった。彼は医師免許の保有者であるため、何の問題もなかったはずである。しかしそれを知らない大学病院で問題視されて

しまい、院長が召喚され査問委員会が開催されることになる。

教授：報道のような事実はありましたか？ あったのならこれは医師法違反ですよ

大森：当病院で医師法違反があったという事実はありません。

教授：報道は、間違いだと？ どういうことですか？

大森：彼は技師ですが、医師免許を持っています

教授：医師免許を持つ者が技師として働くなんで、そんなことあるわけない

教授：この問題は、彼が医師免許を持っていたかどうかではありません。彼が、技師という立場で雇われていたにも関わらず、治療行為をしたかどうかです。組織の和を乱し、ルールに従えない人間には、それ相応の処分を与えるべきです

大森：ちょっと待ってください。今、何ておっしゃいました？ 彼は医師免許を持っています。れっきとした医者です。その彼が命を救ったことの何が問題なんです？

教授：ですから、ルールを……

大森：皆さんは、そんなルールのために、人を見殺しにするおつもりですか？ あの時、彼に、目の前の患者を見捨てるべきだったと？ 私は……甘春病院は、そんなくだらないルールのために人を見殺しにするような病院ではありません！（第11話より）⁹

査問委員会の結果、五十嵐は処分が必要との結論に達する。医師と技師の上下関係にこだわる大学病院側に、大森の主張は全く受け入れられなかったのだ。大学病院の「普通」において大森の価値観は「異質」なものであった。それは新たな意識の変化をもたらす可能性を秘めていたはずである。しかし大学病院の「普通」には、「異質」な価値観を受け入れる気もなければ、その寛容さも持ち合わせてはいなかったのである。だから五十嵐の医師法違反を問題にして開催された査問委員会だったにも関わらず、医師法違反ではないことが明らかになると、問題点をすり替え処分を迫るのであった¹⁰。また画面の構成として、大学病院側からの参加者（教授）はすべて男性であり、その中に「異質」な価値観の象徴として存在した大森がその場で唯一の女性だったことは、現実の反映として興味深い。

女性の活躍やダイバーシティ推進が求められているようになって久しい。また自治体や企業などでも積極的な取り組みが行われてもいる。それにも関わらずその効果は非常に限定的であり、または効果が現れていない状況にあるように思われる。この点について佐々木かをりは、日本のダイバーシティ政策が間違っていることを指摘し、

求められているのは「構成員の多様な性別でも年齢でもなく、「視点のダイバーシティ」である」ことを指摘している。

水本も甘春や大森も女性であるという点においては、多様性の一つとして並び得る存在であった。しかし物語冒頭の水本と甘春は男の仮面を被っていたのであり、それでは「視点のダイバーシティ」とは程遠いと言えるだろう。またそのような彼女たちは、後に続く者たちのロールモデルとしても不適切だと言わざるを得ない。なぜならこれまでも男性化した女性リーダーのモデルは数多く存在していたからだ。今求められるのは、「普通」とは異なる〈女性〉としての視点、つまり男性化されていない女性の視点であり、新たな可能性を示す〈女性〉としてのロールモデルなのである。今回分析した『僕らは奇跡でできている』や『ラジエーションハウス』は、その新しいモデルと多様な視点の必要性を示している作品だと言えるだろう¹¹。

《註》

- 1 FNNの街頭調査では、100人中、賛成88人で反対12人であった。(FNN PRIME ホームページ)
- 2 本稿での引用は、当該場面に相当するノベライズ版から行うことにする。状況描写などがよりの確に行われているためである。
- 3 帯に記された言葉が相河の個性を端的に表現しているのも、その他のいくつかも引用しておく。
「生き物のフシギが大好きな主人公が、常識にとらわれない発想で波乱を巻き起こすコミカル&ハートフルドラマ」(上巻)「ウサギでもカメでもいい。大事なのはあなたが“いる”こと。」「誰でもできることは、できてもすごくないんですか?」「常識、義務感、他人の目……。 “普通ではない”主人公が、あなたのココロを自由にする!」(下巻)
- 4 横幕智裕(原作)とモリタイシ(作画)による漫画『ラジエーションハウス』は、『グラウンドジャンプ』に2015年10月から連載されている。2020年2月現在、コミック版が第9巻まで発売されている。
- 5 原作である漫画版が現在連載中であることから明らかなように、既に最終回を終えたテレビドラマ版には原作と設定が異なる箇所が多々ある。特に第9話から第11話(最終話)と特別編は、オリジナルの内容になっている。
- 6 番組ホームページでは、五十嵐の人物像について次のように紹介されている。
「天才放射線技師 五十嵐唯織 写真には必ず“真実”が写ると信じている放射線技師、アメリカで最も権威ある放射線科医から認められた後、帰国し、小さい頃から片思いしている甘春杏(あまかす・あん)が放射線科医として勤務する甘春総合病院で働き始めることになり、病の“写真家”として、患者の“視えない病”を診つけ出し、命を次々と救っていく。」
- 7 原作では、病院を継ぐことになっていたにも関わらず他界してしまうのは杏の弟

- である（姉弟の二人っ子である）。ドラマ化にあたっては、兄という設定（兄妹の二人っ子）のほうがより現実的であると考えられたのではないだろうか。つまり性別に基づく相続ではなく、年長者が家を継ぐという一般的に受け入れられやすそうな設定に変更されたのだろう。
- 8 水本が「仕事、がんばってたのは、自分に自信がないから」（下巻150頁）と語る場面がある。また甘春の場合は、番組ホームページの人物紹介に「真面目でプライドも人一倍高い性格だが、実のところ自分にまったく自信がない」と記されている。
 - 9 この引用箇所では、必要のない部分を一部省略している。
 - 10 より正確に言うなら、体裁の良い理由で処分を求めることができなくなった大学病院側は、体面を気にすることなく本性を露にしたと言うべきだろう。
 - 11 価値観の変容のみに働き方改革を委ねることが危険なことは、十分に承知している。なぜならそれは「ブラック企業」の論理に通じるからだ。しかし価値観の変容を伴わない働き方改革は、結局のところ、改革を必要とする人々に何のメリットも生み出さないだけでなく、むしろそれに乗じることができない人々を疎外する社会を形成する可能性が高いことに意識的である必要があると考えている。そして今日の日本社会は、後者になっているように思われる。

《引用参考文献》

- DVD『僕らは奇跡でできている』TCエンターテイメント, 2019年
 DVD『ラジエーションハウス：放射線科の診断レポート』ポニーキャニオン, 2019年
 橋部敦子（脚本）、木俣冬（ノベライズ）『僕らは奇跡でできている』（全2巻）扶桑社, 2018年
 横幕智裕（原作）、モリタイシ（作画）『ラジエーションハウス』（既刊9巻）集英社, 2016年～
 佐々木かをり「日本人の大多数はダイバーシティの意味を誤解している」『Diamond Online』2015年4月8日掲載〈<https://diamond.jp/articles/-/69754>〉〈<https://diamond.jp/articles/-/69754?page=2>〉〈<https://diamond.jp/articles/-/69754?page=3>〉2020年2月14日最終閲覧
 「あなたは どう思う？ 小泉進次郎環境相の育休取得に街の反応は」『FNN PRIME』2020年1月16日〈https://www.fnn.jp/posts/00049800HDK/202001161148_MEZAMASHITelevision_HDK〉2020年2月14日最終閲覧
 「窪田正孝「ラジエーションハウス」のここがヘン！ 現役放射線技師が本音で語る実情」『デイリー新潮』2019年6月17日掲載〈<https://www.dailyshincho.jp/article/2019/06170600/?all=1>〉2020年2月14日最終閲覧
 『ラジエーションハウス：放射線科の診断レポート』番組HP〈<https://www.fujitv.co.jp/radiationhouse/introduction/index.html>〉2020年2月14日最終閲覧